

溝口常俊著

## 『日本近世・近代の畑作地域史研究』

今里 悟 之

本書の著者は、主に近世村落の歴史地理学を専攻し、インド・バングラデシュ・ネパールといった、南アジア地域の定期市や行商などの研究も行ってきた。本書は著者の主に初期の著作の補筆集成であり、旧稿の大部分は一九七〇年代後半から八〇年代前半に発表されている。本書をすでに書評された有田正一郎氏によれば、本書があと十年早く刊行されていれば、畑作地域論をより強調する内容になったであろうという。一九八〇年代が、日本の畑作文化を強調する研究が隆盛した時期であったことは、本書の序章にも詳しいが、著者は近年の「複合生業論」の流れの中で、最近の旧稿も加え、畑作と稲作あるいは他の生業との並存性を重視している。評者は、歴史地理学や歴史学を専攻する者ではなく、文化・社会地理学の立場からこの書評を行いたい。本書の目次は、次の通りである。

評書

## 序章

第Ⅰ部 甲州御勅使川扇状地畑作村落の展開過程

第一章 西野村の世帯構成

第二章 佐次兵衛家の百姓経営

第三章 原七郷の行商活動

第四章 百姓日記分析

第五章 甲州における通婚圏

第六章 甲州における奉公人移動圏

第Ⅱ部 焼畑村落の地域的展開

第七章 甲州早川流域焼畑村落の展開

第八章 飛騨白川郷の焼畑

第九章 屋久島における世帯構成と切替畑

第Ⅲ部 畑作・水田複合の地域像

第十章 隠岐における田・畑作と地域像

第十一章 尾張における田畑の景観と開発

終章

序章では、研究史を踏まえ、本書全体の問題設定がなされる。第一節では、日本における水田中心史観に対する批判と、その後の畑作文化論に対する批判として、日本史学・地理学・民俗学などの諸研究が検討され、近世・近代での本格的な畑作（地域）研究が少ないこと、畑作村や畑作民の生活の実態が明らかにされていないこと、の二点が問題点として指摘される。第二節では、畑作の一形態である焼畑耕作に関する研究史が、地理学・民俗学・経済史学・生態人類学などの分野にわたり検討され、近世以前の焼畑村落の展開過程や生活実態、特に人口支持力・土地所有構造・農外生活基盤を明らかにする必要性が示される。第三節では、

稲作と畑作の並存性・融合性を示すために、近世農書の研究や地理学の畑地灌溉研究が紹介される。最後に第四節で、本書全体の課題が提示される。そのポイントは、畑作村における普通の百姓の生活を描き出すこと、村落とその上のスケールの小地域および下のスケールの家との関連を重視すること、主に近世の宗門改帳・検地帳と明治期の戸籍・土地台帳を併用し江戸初期以降の通時的変化を照射すること、水田村落との交流にも注目し地域全体の生業システムを明らかにすること、以上である。

第一節は、水田が皆無である甲州御勅使川扇状地（甲府盆地西部）の九カ村の、近世から近現代に至る生活実態の解明である。

第二章では、一七世紀後半から一八世紀初頭の西野村を事例に、各戸における本百姓・抱屋・門屋・譜代下人・下人という身分構成の変遷が検討される。本百姓を筆頭とした複合家族という形態から、傍系家族や抱屋や門屋が順次独立して、最終的に本百姓が五倍以上に激増したという。さらに譜代下人は、定説であった終身隷属的な形態から、数年ごとに主人を変える短期従属的な形態に変化したという。このような身分移動を経て本百姓が創出されたというが、その基盤として、耕地の開墾と商業による蓄財が指摘される。

第二章では、同じく西野村を事例に、最上層戸の土地集積過程・地主経営・商業活動が検討される。近世前期の耕地開発による中層戸の激増ののち、一八世紀後半から少数の有力戸に土地が集積され階層分解が生じたという。最も集積を進めた事例戸の場合、年貢不払いの百姓による土地の質入れ、煙草問屋の成功による蓄財、近隣の水田村の所有地からの小作収益などがそれを可能

にしたとされる。その後、家内部の従属家族の独立、中層の行商による蓄財などにより、幕末の階層格差の縮小に至る。甲斐国全域や江戸向けの商品作物としては、煙草のほか、小麦・大麦・木綿・大豆・木綿種などがあつたという。

第三章では、西野村を含めた原七郷地域の行商活動が、村明細帳や村産物表を主な史料として検討される。近世の農閑期の野売りや行商の品目は、煙草・木綿・藍・柿・甘藷・牛蒡・大根・葱などであつたという。明治期には特に下層の小作層が、反物・雑品・茶・魚などの行商や、人力車・荷車・荷物運搬・大工などにも従事し、商品作物が煙草・綿から桑に転換した大正以降は、衣類や生活雑貨の行商の販売品・販路・行商組織も順次変遷していったという。行商は中層・下層において行われ、昭和三〇年代以降は工場進出や果樹栽培の導入により下層が撤退した。本章は、複合生業論からの通時的分析として価値が高い。

第四章では、主に明治期の日記をもとに、西野村の中層戸の明治一六―二五年の農業経営・地主経営・商業活動・日常行動などが検討される。戸主自身の養蚕業と麦・甘藷・綿の栽培のほか、地主・商人・大工宿としての多様な生計戦略の具体像が明らかになる。特筆される点は、雇農や大工の年間生業暦の提示である。日記を用いた農村生活の研究は、著名な『西山光一日記』<sup>⑥</sup>をはじめ主に一九九〇年代に盛んになるが、本章もその流れを汲む。史料としての日記から何を体系的に読み取るかには誰もが苦心するが、生業の複合性に注目して、ほぼ同じ時期の佐久盆地および鬼怒川流域の農家の経営・労働・技術・生活暦を主に日記から解明した、中西僚太郎氏の研究との地域比較は興味深いだろう。<sup>⑥</sup>

第五章では、甲州一円の一七カ村を事例に、近世中期の通婚圏が検討される。村内婚率は山村・平地村・都市の順に高いが、大半の村では二〇―五〇%程度で、従来の通婚圏研究で言われていたほど割合は高くないという。距離では、四km圏内に六〇%以上が収まるとされる。また、畑作村は水田村とも通婚はあるが、畑作地域内部での通婚が七割近くに達するという。その理由は、生業技術の伝達の容易さを重視したためなのか、あるいは別の文化的障壁があったためであろうか。本章の核心は、社会階層別の村内婚率は下層よりもむしろ上層の方が高く、通婚圏は（近世中期に限ってではあるが）時代とともに必ずしも拡大しないという、定説とは異なる指摘である。その背景として著者は、一村あたりの上層戸の数の多さ、本百姓から抱屋への入婚の存在などを挙げている。つまり、村内の階層格差の相対的な小ささといえようか。この条件を、従来の通婚圏研究の対象地域における条件と詳細に比較検討すれば、さらに興味深い知見が導き出されるかもしれない。

第六章では、甲州一円の二五カ村の宗門改帳から、奉公人移動圏が検討される。村内移動率が五〇%を超えるのは、七四カ村中一五カ村にすぎず、通婚圏に類似して八km圏内でおおよそ収まるといふ。男性は村内か遠距離の都市へ、女性は近距離に移動する傾向が強く、全体の平均年齢は二四・六歳、平均奉公年数は二・九年で、若年層の短期型が多いという。輩出側は主に抱屋や門屋で、雇用側は大部分が所有地六反以上ないし石高八石以上の上層である。二km圏以内では水田村・畑作村の区別はみられず、二―八km圏では畑作村への水田村からの流入はほとんどなく、八km以上は畑作村からのみである。その理由は不明というが、読者としては

やはり気にかかる。移動先では、甲府や江戸が卓越するという。第II部は、日本各地の畑作村落における、生業形態の検討である。

第七章では、甲州巨摩郡西河内領（山梨県西端の山間部）の一〇カ村を事例に、近世初期の検地帳や明治期の物産表などから、焼畑耕作と土地所有階層との関係が検討される。焼畑は従属小作人のための耕作地とする定説とは異なり、むしろ上層ほど焼畑に依存し出作も行い、かつほとんどの戸が村内各所に分散して焼畑耕地を所有していたという。また焼畑村落でも、一戸で村の総耕地面積の二〇%を所有する大百姓も存在したという。本書の中でも、とりわけ高く評価され得る知見であろう。また、上層の伐採請負、中層以下の柚仕事・木材運搬・木製品製造・金山労働、楮・三椏・茶・煙草などの商品作物栽培といった生業の実態が示される。図七―二の焼畑地名の分布は、文化圏区分の基礎資料としても有用だろう。小字別の焼畑分布に関する表七―六と図七―五も力作だが、山地斜面に焼畑が多いという当然の事実以上に、南斜面の焼畑の少なさが気にかかる。日照の良い場所から普通畑にする努力がなされ、それが難しい場所が焼畑にされたということであろうか。

第八章では、飛騨白川郷二カ村を事例に、近世から明治期に至る焼畑分布地と所有階層の変遷が検討される。時代を遡るほど焼畑が多いとの定説を覆し、近世後期から明治初期にかけての面積の激増、さらに焼畑から水田に移行した耕地はないことが指摘される。明治初期の分布地では、標高七〇〇―一〇〇〇m、集落からの距離一―二km、山地中腹、傾斜二〇―三〇度、東斜面方向

が多いという。表八一五のこのような数値の含意する点であるが、標高の場合は集落からの比高もより詳細に知り得たいし、集落からの距離については耕作圏の模式図化も考え得る。例えば、2 km や5 km という数字が表す生活上の意味は何であろうか。地形や傾斜の場合、白川郷全体の地形条件に比しての焼畑立地点の特徴も知り得たい。また所有については、階層分解が進まず、組（一般にいう村）の共有地の割合も高かったという。この焼畑共有地の住民による自由利用という指摘があるが、例外的な一集落の聞き書き<sup>⑥</sup>の引用のみに基づく立論であり、一般化は危険であろう。また、最多の村で九五倍の焼畑面積の激増という指摘があるが、例えば安永検地においても集落から遠方の焼畑は見逃された可能性や、焼畑検地は共有地あるいは逆に各戸の名請地に限られた可能性などはないだろうか。さらに、実測の困難な山地にあり、しかも数年で移動する焼畑は、その帳簿面積をどの程度まで信頼し得るだろうか。これらの点は、第七章と並んで古島敏雄<sup>⑦</sup>への反証として重要なだけに、より慎重な検討が必要かもしれない。

第九章では、白川郷よりさらに生産力の低い屋久島の一三カ村を事例に、近世から近代に至る世帯構成と生業の実態が検討される。複数の傍系家族を含む複合家族の普遍性と、妻が不在で夫が子供と同居する家族形態が指摘されるが、このような特異な家族形態と生業構成との関係の有無なども気にかかる。また階層ごとに生業基盤の保有状況が示され、近世から近代への人口増加の背景として、焼畑の開墾と漁業や桑栽培の存在が指摘される。

第三部は、畑作・水田複合という、近世近代の地域像の提示である。

第十章では、隠岐の五九カ村を対象に、近世前期の地誌を史料として、牧畑一色という生業像を再考するため、生業の実態が検討される。石高・戸口・牛馬・田畑・農産物・水産物・林産物・皮革業・廻船業の状況が村ごとに地図化され、項目ごとに傾向が指摘される。隠岐では、家・村・領国の各スケールで、農業・漁業・林業が相互補完的に営まれていたという。このようなデータベース化と地図化をより積極的に生かし、例えば地域区分や文化圏の提示などができないだろうか。最も詳細な魚種ごとの分布図についても、史料上の制約は大きいだろうが、実際の漁場の位置や権益との関連なども気になるところである。

第十一章では、大水田地帯である尾張全域の八九二カ村および名古屋区を対象に、主に明治の地籍帳・地籍図から畑作の実態が検討される。本章の作図は、明治期の二万分之一迅速図をもとに村の境界を記入した白地図を作成し、一七五項目もの地目を全て入力して、ここに図化するという遠大な作業である。村ごとの地目率や開墾耕地面積などが示され、大水田地帯での畑地の普遍性、水田耕作の補助としての鳥畑の広範な存在などが指摘される。いずれの分布図も興味深いが、例えば図十一―二―四からは、平野に水田が、丘陵地に畑地が、山地に山林・原野がそれぞれ多いという以上の含意が十分に汲まれているだろうか。

終章では、本書全体の結論が提示される。第一は、畑作村では高い人口支持力があり、その基盤として畑作以外の多様な生業が営まれ、近世の「勤勉革命」は畑作村でより顕著であったという知見である。第二は、第三部の分析に基づく、隠岐型と尾張型という村落類型の提示である。隠岐型とは、水田が卓越せず、畑

作・漁業・狩猟・商工業などさまざまな生業が並存する村落である。逆に尾張型は、圧倒的に卓越する水田に生業が収斂する村落である。日本の村落は、このどちらかの型に属するというよりは、むしろこれらを両極とするスペクトルのどこかに位置することになるのかもしれない。第三は、いずれの事例でも、家・村・小地域の各スケールにおいて、稲作と畑作さらに他の生業を、できるだけ組み合わせようとするシステムが存在したという指摘である。

このように本書は、歴史地理学や歴史学のみならず、複合生業論としては文化地理学・民俗学、農村社会分析としては歴史人口学・農村社会学・社会地理学、そしてより大きな枠組としては日本文化論にもそれぞれ繋がりが得る、極めて視野の広いものといえる。その中でも本書の特徴と意義は、著者自身も言及する部分を含め、およそ次の三点になるだろう。

第一は、畑作地域論あるいは山村・離島文化論への貢献という点である。その一つは、焼畑所有と社会階層との関係や焼畑面積の時代的变化などに関する、定説への反証を試みたことである。さらに、焼畑山村や離島における一定の商品経済の浸透や外部との交流を広範に描き出し、後進的・閉鎖的という従来の地域像に再考を迫る、地理思想的な知見を提示したことである。これらの地域の人口増加の原因として、耕地の開墾や生業の多様性が指摘されるが、背景となる農林漁業技術の発達や交通・流通形態の革新などの関連も、本書を地域論的な複合生業論としてみるならば、今後より詳細に知り得たい。

第二は、家の社会階層移動や土地集積過程、生業様式の変遷、

労働移動圏や通婚圏の変化など、史料的に許される限りでの長期の変動を解明しようとした点である。ただ惜しまれるのは、特に第Ⅰ部の各章の分析結果が、必ずしも十分統合されていない点である。著者自身が別稿で若干言及したように、各章で扱われた諸事象の相関関係などが地域外部の要因なども含めて模式図化されれば、本書の地域論的視点がさらに生かされたかもしれない。

第三は、特に小地域という空間スケールに着眼した点である。このように比較的広域のスケール、さらには生活空間の重層性（本書では家・村―小地域―領国）に注目する視角は、農業・農村地理学のほか都市地理学や社会地理学などの基本視角の一つでもある<sup>⑩</sup>。歴史地理学でも、近世の地域的な政治支配体系などの解明に、この視角が採用されてきた<sup>⑪</sup>。しかし本書のように、人口・生業など多数の項目にわたって個体スケール（個人・家・村）をベースに立論する場合、膨大な史資料の収集解読・データベース化・図表化という多大の労力が要求される。技術的には、GIS（地理情報システム）の利用がこれを可能にした<sup>⑫</sup>。この発想と情熱にはひたすら敬服するだけに、具体的に提示された諸数値（例えば五・六・八・十一章）のより踏み込んだ解釈や、地図化からさらに一歩進んだ分析を今後期待するのは、筆者ばかりではないだろう。例えば、各章で提示された行商圏・奉公人移動圏・通婚圏・出作入作圏などの、それぞれの重なり具合や相互関係はどのようになるのだろうか。これは、当時の機能地域の包括的な解明や、地域区分・類型化などにも繋がるだろう。

近年著者らは、近世尾張国の現名古屋市区を対象に、地誌・村絵図・郡図・名所図会・日記などを史料として、明治期を扱った

本書第十一章の旧稿に先立ち、さまざまな経済的・文化的事象の分布図を作成している。例えば、土地利用、戸口、石高、牛馬、寺社、自殺・心中場所などである。また、綿・繭・工芸品・野菜などの商品流通圏、宿場町の助郷圏、交通中心地の勢力圏などから、当時の具体的な機能地域が示されている。さらにこの分析結果の一部も加えつつ、「中心—周辺」・「都市—非都市」という二軸を基準とした、近世および明治期の尾張内部の地域類型化とその空間秩序の解明が実際に行われている。

著者が進めてきた、このような近世近代の都市システム論的・中心地論的な研究を、元来主に現代を対象としてきた同様の諸研究と接合させれば、非常に長期にわたる地域システム変遷史も可能となるだろう。歴史地理学における、広域スケールの機能地域論の先駆の一つとして、さらに本格的な計量分析の礎石としても、本書の価値は高い。

- ① 1) Mizoguchi, T. Peddling activities of aluminunware sellers in Bangladesh. *Geographical Review of Japan* 60 (B)-1, 1987, pp. 83-102. 2) Mizoguchi, T. Traders in periodic markets. Ishihara, H. (ed.) *Markets and Marketing in West Bengal and East Nepal*. Department of Geography, Nagoya University, 1989, pp. 43-64. など。
- ② 有園正一郎「書評・溝口常俊著『日本近世・近代の畑作地域史研究』」歴史地理学二二(三)、二〇〇三、六四頁。
- ③ 西山光一著、西田美昭・久保安夫編『西山光一日記一九二五—一九五〇年—新潟県—小作農の記録』東京大学出版会、一九九一、など。
- ④ 中西僚太郎「近代日本における農村生活の構造」古今書院、二〇〇三、一一—三頁。

⑤ 同書、一五一—二九〇頁。

⑥ 江馬三枝子「飛騨白川村」未来社、一九七五、四三—四四頁。

⑦ 古島敏雄「近世日本農業の構造」日本評論社、一九四三、二六五—二七六頁。

⑧ 米家泰作「太閤検地における山畑と焼畑について」愛知県立大学文学部論集五一、二〇〇二、五一—五三頁。

⑨ 米家泰作「中・近世山村の景観と構造」校倉書房、二〇〇二、一—六二頁。

⑩ 溝口常俊「農業・農村の変革期」歴史地理学一五二、一九九二、三九—四二頁。

⑪ 今里悟之「日本村落の空間テクスト論の視角と課題」人文地理五四、二〇〇二、三二—三四頁。

⑫ 山澄 元「近世村落の歴史地理」柳原書店、一九八二。

⑬ 著者が主に使用したのは、谷 謙二氏（現・埼玉大学）によって開発された「MANDARA」である。

⑭ 新修名古屋都市史第三専門部会編、溝口常俊監修『江戸期なごやアトラス—絵図・分布図からの発想』名古屋市長務局、一九九八。

⑮ 溝口常俊「江戸期尾張の中心周辺構造」（名古屋大学文学部史学科編『いま、歴史資料を考える』名古屋大学文学部史学科、一九九九）一—三—二四頁。同「明治期における尾張の土地評価体系—G.W. Skinnerの中心周辺論再考」（石原 潤編『農村空間の研究（上）』大明堂、二〇〇三）、一九—三〇八頁。

（A5版、三九一頁+四九頁 二〇〇二年二月

名古屋大学出版会 六五〇〇円+税）

（大阪教育大学講師